

一寸光陰不可軽

人国記

昭和42年4月、東洋工業(現マツダ)に入社し、半年間の研修期間を終えて配属されたのは、設計部のシャシー設計課。その中には係が4つあり、私は第4シャシー設計係の一員となりました。「シャシー」という言葉は、時代やメーカーなどによって定義が少し異なりますが、うちのシャシー設計課が担当したのはフレームやサスペンション、ブレーキなど、「あとはエンジンさえあれば走行できる」という領域でした。

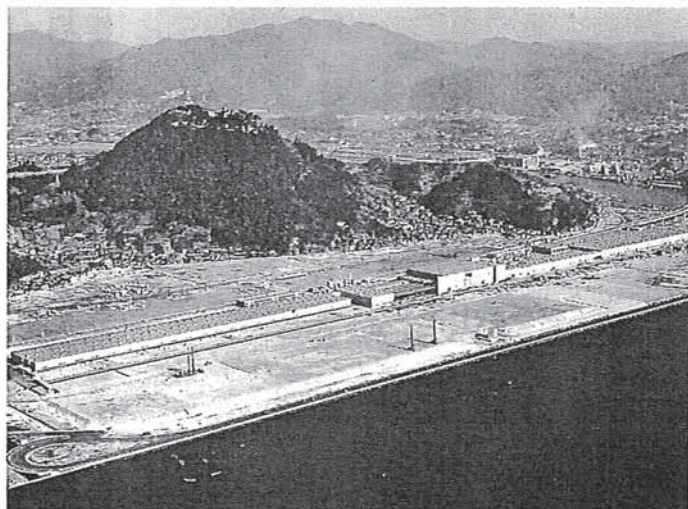
貴島 孝雄 (62) ⑦

元マツダロードスター主査

扱う部署ではなく、いわば「新技術開発チーム」。10人ほどの所帯のうち研究者が3〜4人おり、残りが助手の役目。私は、のちに常務になった南孝則さんの下で、ひたすら欧米の論文を翻訳したりデータ解析を手伝ったりの毎日でした。

日本の自動車産業がまだ幼稚だったあの当時、技術の基本は欧米の論文がほぼすべて。英語やドイツ語の難解な文章を「読め」と手渡されるんです。でも、ドイツ語なんて一語ずつ辞書と首っ引きで、1カ月に1編読めるかどうかというペースでした。雰囲気はまるで大学の研究室で、いつも頭を抱えていたけれど、大学進学を断念した私には、その雰囲気は味わえてとてもうれしかった。

南さんは、私が微分積分を理解していないとみるや、微分方程式を使って



貴島さんが入社した昭和40年代の東洋工業本社(マツダ提供)

解く「振動」の「宿題」を出し、「来週までに解いてこい」と命じるんです。寮に戻り、仲間から「飲みに行こう」と誘われても、誘惑を振り払って机に向かう夜も度々ありました。つらかったけれど、この時に叩き込まれた基本が今につながっていると思います。

その後も、スキルアップにつながる社内制度は何でも利用しました。「社内研修所」という2年間の研修プログラムを受験し、通常の業務に加えて品質管理や統計などの専門的な理論を学んだり、広島大の聴講生として機械力学や振動工学を履修したりもしました。

大学の教室で、学生たちは後ろに固まりますが、私は最前列に陣取った。仕事で直面する問題の解決策が理論的に学べたので、楽しくて仕方なかった。大学教授になった今、「知りたいことを学ぶ喜び」を何とかして学生たちに伝えたいな、と思います。

新技術開発チームの一員に

4係は、1〜3係のように量産車を

九州・山口



産経新聞九州山口版は月々購読料3000円の朝刊紙です。九州・山口地域でも、ご自宅や会社へ配達いたします。申し込みは下記のフリーダイヤルか、専用サイトです。

ニュースのご連絡は九州総局

TEL 092(741)7088
FAX 092(726)2572
kyushu@sankei.co.jp

〒810-0004
福岡市中央区渡辺通5-23-8
サンライトビル3階

山口支局

TEL 083(923)3333
FAX 083(923)3334
yamaguchi@sankei.co.jp

〒753-0074
山口市中央3-6-2

購読のお申し込みは

0120(34)3733
www.sankei9.com

販売のお問い合わせは
TEL 092(741)2323

広告のご用は
TEL 06(6633)9474